

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 4 日現在

機関番号：33906

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870866

研究課題名(和文) 公共的な対話活動の営みが果たす「シティズンシップ教育」の可能性に関する研究

研究課題名(英文) A study on the possibility of "citizenship education" by public dialogue activities

研究代表者

三浦 隆宏 (MIURA, TAKAHIRO)

梶山女学園大学・人間関係学部・講師

研究者番号：90633917

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では以下の成果を得られた。(1)参加者らとともに哲学カフェといった公共的な対話活動を運営してゆくことによる「それなりの市民」の育成。(2)公共的な対話の場の「サードプレイス」の一例としての理解。(3)公共的な対話活動は共同体感覚を育むという政治的意義をもつ。そして(4)哲学カフェよりもより少人数でなされる「相談」としての対話の重要性にも気づいた。

研究成果の概要(英文)：In this study, we obtained the following results: 1) the development of "adequate citizens" by which manage public dialogue activities such as philosophy cafe together with participants, 2) the understanding the forum of public dialogue as an example of the "third place", 3) public dialogue activities have a political significance to cultivate a community sense, and 4) we realized the importance of dialogue as a "consultation" to be made in a more smaller than philosophy cafe.

研究分野：哲学・倫理学、政治学

キーワード：哲学カフェ 公共的な対話 それなりの市民 サードプレイス 共同体感覚 相談 アーレント

1. 研究開始当初の背景

裁判員制度はもとより、原子力発電をめぐる討論型世論調査やタウンミーティング、あるいは遺伝子組み換え農作物に関するコンセンサス会議と、「市民」参加型の制度がこの国にも徐々に定着しつつある。この市民感覚・市民目線重視の流れの背景には、「専門家」に対する不信の念が一般市民のあいだで急激に広まっていることを挙げるができるが、とはいえ一方では、デモに積極的に関わる市民らを「プロ市民」と呼んで、遠ざける向きが、私たちの中にないわけでもない。このような時代状況において、「市民であるとはどういうことなのか」という「シティズンシップ(市民性)」概念に対する再検討が、求められていると考えるに至った。

「シティズンシップ教育」というと、政治学者クリックの主唱によりイギリスで 2002 年から実施されている、学校での子どもたちを対象とした市民性教育がよく知られているが、しかしそれは、超高齢社会であるわが国では、一般市民を対象とした生涯学習としても必要とされるものであるだろう。

本研究代表者は、ハンナ・アレントの政治理論を文献学的に研究するとともに、彼女のいう公共空間のひとつの具体的なありようが、「哲学カフェ」をはじめとする公共的な対話の場において実現されていると考え、一般市民らとともにこの公共空間をつくる実践を十年以上にわたり試みてきていたが、その過程で見えてきたことの一つとして、彼女が公共空間の担い手として想定していた、自分の意見を他者に向けて積極的に発言する「行為者 actor」の重要性に劣らず、みずからは進んで発言せずとも、参加者のさまざまな意見を聴くことに重きを置く「観客 spectator」や「傍観者 onlooker」としての市民のあり方の積極的な意義であった。つまり、キムリッカのいう「公共的な討論に参加する能動的な市民」だけでなく、ダールのいう「それなりの市民 adequate citizen」もまた重要な存在なのであり、そういう「ふつうの市民」(篠原一)を育成する場として、一般市民でも気楽に立ち寄れる公共的な対話の場に着目し、この場が果たす可能性に目を向けた次第である。

2. 研究の目的

哲学カフェに代表される緩やかな対話活動は、討論型世論調査やコンセンサス会議などと異なり、一般市民が比較的気楽に参加できる対話の場として、近年この国においても全国さまざまな地域において活発に行われるに至っている。とはいえ、この間口の広い対話の営みは、これまでに考えられていた以上の大きな役割を果たす可能性があると考えられるものの、その理論的な意義は十分に解明されないまま、その実践だけが積み重ね

られているという状況にあった。

そこで本研究では、哲学カフェやサイエンスカフェなどの公共的な対話の場が、「シティズンシップ教育」という点で、どのような可能性を有しているのかを、全国各地で行なわれている市民との公共的な対話の場を調査・実践していくことで理論的に明らかにするとともに、一般市民との対話の営みを担う「ファシリテーター」としての新たな研究者像を広く社会に提示することを目的とした。

3. 研究の方法

大阪での「中之島哲学コレージュ」や、東京での「テツドク!」、および仙台での「てつがくカフェ」など、地域やそれぞれの特色を異にする対話の場を、研究期間を通じて幅広く参与観察するとともに、ときには研究代表者自身が対話の場を企画したり、進行役を担うことで実践的に研究していくというフィールドワークの方法を軸とした。その結果、研究開始当初は調査・実践予定になかった、富山県氷見市の himming café や福岡大学付属図書館多目的ホール、そして石川県かほく市の西田幾多郎記念哲学館といった場所でも対話の場を設けることになった。

また熟議民主主義に関する国内外の文献や市民との対話を活性化させる「ファシリテーション」のあり方をめぐるさまざまな文献(たとえば平田オリザ氏や鴻上尚史氏ら劇作家の著作、およびカウンセリングの一手法である「エンカウンターグループ」に関する文献等)を幅広く収集し、読み進めていくことで、上記の調査・実践で得た見聞と、後者の文献研究から得た知見とを重ね合わせていくという方法をとった。

なお本研究は、研究分担者および連携研究者を要しない研究代表者による個人研究であったが、文献研究で得た知見をその都度、公共的な対話の実践というかたちで参加者らと共有し、社会に還元していくものであり、その点一般市民らとの共同研究という側面をももっていたと言える。

4. 研究成果

研究成果として主に以下の3点を挙げることができる。

(1) 名古屋での公共的な対話の場の常設化・普及

全国各地の公共的な対話の場を調査する傍ら、本研究が開始された 2013 年 4 月から名古屋市中区の「カフェティグレ伏見店」において、月に一度のペースで哲学カフェの定期開催を行なってきた。

当初の参加者数は多くて 6、7 人であったものの、秋以降には 10 人弱に達し、12 月には 17 人の参加者を得るまでに至った。そし

て、参加者の紹介から翌 2014 年 4 月からは名古屋駅西口の「カフェぶーれ」でも哲学カフェを開始し、ティグレとともに月 2 回の定期開催を行なうようになり、2016 年 3 月までに計 62 回の対話の場をもつことができた。（各回のテーマ等については、「哲学カフェ@名古屋」のホームページを参照。）

特筆すべきは、当初は研究代表者が進行役を務めるなどしてその前面に出ていたものの、2014 年ぐらいからは常連参加者の何人かと共同で企画を立て、運営するというスタイルに自然となっていた点である。その結果、研究者が進行役等を「任される」のではなく、学生や一般市民みずからが進行を担当したり、対話の場の運営に関わったりするのが自明の雰囲気となるに至った。そして 2015 年 8 月以降は、研究代表者が一切関与しないかたちでの哲学カフェが、名古屋駅東口の「カフェ・サンラファエル」という新しい場所で定期開催されるまでになった。これは公共的な対話活動が、専門家にお任せするのではなく、市民が自分たち自身で各々の役割を担い合うという「シティズンシップ」の意識を育んだ、一つの具体的な成果であると言える。

(2) 公共的な対話の場の「サードプレイス」としての性格づけ、およびその政治的意義の把握

討論型世論調査やコンセンサス会議に代表される「熟議」タイプの対話の場と比較することで、「認知症カフェ」や「がん哲学外来 メディカルカフェ」、「憲法カフェ」といった、哲学カフェとともにここ十年ほどで急速にこの国において普及した対話の場を、「それなりの市民でも気楽に立ち寄れる（＝間口の広い）公共的な対話の場」として明確化したうえで、その特徴を「家庭でもなく、職場でもない、第三の居場所」として社会学者のオルデンバーグが 1989 年に提示した「サードプレイス」の現代版として性格づけた。

また公共的な対話の場が「シティズンシップ教育」として果たす役割として、社会のあらゆる領域で分断化が進み、「私たち」という意識をなかなか持ちにくい現在において、「私」の中に「私たち」という感覚を育むこと」という点を挙げ、この場が今後もちうる政治的な意義を把握することができた。

この点付言すれば、哲学カフェと同様にそしてより大きな規模で開催されているサイエンスカフェに関しては、研究者が市民を啓蒙する場、自分の研究を広める場として依然として捉えられる傾向にあり、科学（技術）のシビリアン・コントロールという点までには至っていないように思われた。

(3) 「闊」での「相談」タイプの対話の場への着目

研究期間内に訪れた大阪市の「中津ぱぶり

家」や岡山市の「やっち」は、いずれも商店街の元店舗や空き家を利用した共同運営スペースであり、街なかの「カフェ」での対話とは一味違う「闊（しきい）」（建築家の山本理顕氏が、「私的領域の内側にあつて、それでもなお公共領域に属する空間」として定義した場所）での対話の場として、たとえば非正規雇用の人らが集まって話し合う「いまの世を生き抜くための勉強会」や、愛や性（セクシュアリティ）について少人数で語りあう「こたつむり café」といった、少人数での「相談」的な対話が定期的に開かれていた。

これらの少人数での対話の場をじっさいに経験することで、哲学カフェよりも対話の場のサイズが小さく、当事者どうしの「相談」を中心とした対話の場の重要性に気づかされることになったのも、成果として挙げることができる。

哲学カウンセリングやオープンダイアログといった国外での実践とも関係づけながら、本研究がその対象としていた、一般市民らによる「間口の広い」公共的な対話の場とは真逆の、当事者らを中心とした「間口の狭い」対話の場の研究を引き続き行っていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

三浦隆宏、「私たち」という感覚を育むために 哲学カフェとシティズンシップ、臨床哲学、第 16 号、大阪大学臨床哲学研究室、3-22 頁、2015 年、査読有
<http://hdl.handle.net/11094/51594>

三浦隆宏、哲学カフェがめざすもの Philosophy To The People、椛山人間学研究、第 9 号、椛山人間学研究センター、106-125 頁、2014 年、査読無
<http://shrc.sugiyama-u.ac.jp/images/nenshi2013.pdf>

〔学会発表〕（計 4 件）

三浦隆宏、哲学のインプロヴィゼーション、第 6 回ネットワーク日本哲学研究会、2015 年 9 月 20 日、コープイン京都（京都市）

三浦隆宏、哲学カフェとシティズンシップ 「私たち」という感覚を育むために、第 7 回応用哲学学会、2015 年 4 月 26 日、東北大学（仙台市）

三浦隆宏、アーレント政治思想における「範例」の意味、第 66 回関西倫理学会、2013 年 11 月 3 日、立命館大学（京都市）

三浦隆宏、哲学カフェがめざすもの Philosophy To The People、椛山人間学

研究センター主催 平成 25 年度第 2 回人間
講座、2013 年 7 月 22 日、椋山女学園大学(名
古屋市)

〔図書〕(計 1 件)

、カフェフィロ編、松川絵里ほか 12 名(共
著、4 番目に掲載)、哲学カフェのつくりかた、
大阪大学出版会、2014 年、55-69 頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

哲学カフェ@名古屋ホームページ

<http://cafephilo-nagoya.jimdo.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三浦 隆宏 (MIURA TAKAHIRO)

椋山女学園大学・人間関係学部・講師

研究者番号：90633917

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし